

日本列島には（１）世のころ人類がいなかったと、日本の考古学界では長い間考えられてきた。しかし、1949年に群馬県（２）で1万年以前の富士山の噴火などによって火山灰が降りつもってできた火山灰堆積層＝（３）とよばれる赤土の地層のなかから、石器がみつきり、日本列島にも人類が生活していたことがわかった。（１）世の時期は、石を打ち欠いただけの（４）を道具にした旧石器時代である。

骨がのこりやすい石灰岩の地層から化石人骨がみつきり、静岡県の（５）人や沖縄県の（６）人や（７）人など、新人段階の人骨が発見されている。当時の人びとは、小柄ながら骨太のがっしりした体格で広い額と発達したほお骨をもち、アジア大陸南方系の古モンゴロイドに属していることがわかってきた。彼らが日本人の祖先と考えられ、その後の環境の変化に適応しながら、また中国や朝鮮半島などから渡来して定住した人びととの混血を経て、現代の日本人になった。

およそ1万年前に（１）世が終わり、（８）世の温暖な気候になり現在に近い自然環境となった。早期から前期にかけて、さらに温暖になり、陸地の奥にまで海水が入りこみ（９）と言われる現象もおき、丸木舟を使って漁労もさかんになった。気候の変化は自然環境を大きくかえ、大型動物は絶滅して、猪や鹿・兎などの中小動物が増えていった。森も針葉樹林から、東日本ではブナや、ドングリ・クルミなどを実らせる（１０）樹林へとかわり、海岸には砂浜が発達し、魚介類などが多くみられるようになった。自然環境の変化は人びとの生活に大きな影響をあたえた。すばしこい中小の動物をたくみにとらえるために、投げ槍より命中率の高い（１１）をつくりだし、猟犬を使うようになった。また、鹿などの角や骨で銚や釣針をつくって、漁労も行なわれるようになった。こうした道具をつくりだしたのは、石器をみがきあげてつくった鋭利な（１２）石器である。（１２）石器によって木材などの利用がおおいにすすんだ。

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12

3年

組 No.

氏名